

紹興の階層に対する魯迅の見方（上）

丸尾 勝

一 はじめに

魯迅は、『英訳本《短編小説選集》自序』（1933年）で、「私は都市の大家族の中で生長し、小さい時から古書と師匠の訓育を受けていたので、辛苦に喘いでいる大衆は花鳥と同じように見ていた。時には所謂上流社会の虚偽と腐敗を感じる時があったが、その時は彼らの安楽を羨ましく思った。しかし、母親の実家の農村で時には多くの農民たちと接触することができ、だんだんと彼らが生涯圧迫と多くの苦痛を受け、とても花鳥とは同じではないことを知った。～たまたま文章を書く機会に恵まれたので、私はいわゆる上流社会の墮落と下層社会の不幸を、次々と短編小説の形式で発表した。」(1)と述べている。引用文において、「農民たちの圧迫と苦痛」の「圧迫と苦痛」、「下層社会の苦痛」の「苦痛」は被支配者の受動的文言であるが、「圧迫と苦痛」を与える、支配者の被支配者に対する能動的行為の文言はなく、代わりに「上流社会の虚偽と腐敗」の「虚偽と腐敗」、及び「上流社会の墮落」の「墮落」の文言が用いられている。

「農民たちの圧迫と苦痛」の「圧迫と苦痛」、「下層社会の苦痛」の「苦痛」、「下層社会の不幸」の「不幸」、「辛苦に喘いでいる大衆」の「辛苦に喘ぐ」は被支配の受動的行為の文言である。被支配者に「圧迫、苦痛、不幸、辛苦」を与えるのは支配者であるが、その支配の能動的行為の文言はなく、上流社会の「虚偽、腐敗、墮落」の文言が優先して用いられているのはどうしてか。そして、上記の引用文章中の、「上流社会」

と「下層社会」との対置や、上記引用外の、「下層社会の苦痛」、「虐げられた大衆」、「知識階級」などの文言が階級史観であることを示している。であるのに、被支配者に対する支配の文言はなく、性格の異なる「虚偽、腐敗、墮落」の文言が用いられているが、これらは階級史観による言い方ではない。そして、上流社会の行為についての表現は、たとえば、1927年講演・発表の『革命時代的文学』では、「実力を持っている者は相変わらずに 庄迫し、虐待し、殺戮をしていて」（圏点は論者）(2)であり、階級支配の強い能動的行為の文言である。1931年作の『中国無産階級革命文学和前駆的血』では、「わが勤労大衆はこれまできわめてはげしい庄迫と搾取をこうむるのみで、文字教育すら施されず、ただ黙々として分割と滅亡とに耐えるのみであった。」（圏点は論者）(3)と強い能動的、受動的行為の文言である。同年の『黒暗中国的文芸界的現状』では、「左翼文芸を阻止するものは、誹謗、庄迫、拘禁、そして、殺戮でしかなく」（圏点は論者）(4)と、左翼知識人に対する強い能動的行為の文言である。ところが、上記の『英訳本《短編小説選集》自序』では、「農民たちの庄迫と苦痛」、「下層社会の苦痛」の文言は被支配の受動的行為の言い方であるが、これらの文言と対置する、階級史観に基づく支配の文言はなく、「上流社会の虚偽と腐敗」の「虚偽と腐敗」、及び「上流社会の墮落」の「墮落」の文言が優先して用いられている。どうしてこのような性格の違う組み合わせになったのか。本論では、これを探り、また、この違いは何を意味しているのかを考察したい。ただし、この「上流社会」の場所は紹興であることに留意したい。そして、魯迅の支配階層と被支配階層に対する見方の追求が必要になるので、自伝等と諸作品を探り、また、上層階層に属する、周家等の大家のことなども調べる。そして、階層間の支配被支配についての見方とともに、「人の思想」とも言うべき思想の形成

及びその展開も追求する。

魯迅筆者の呼称についてであるが、周樹人は『狂人日記』の執筆の際初めて魯迅という筆名を用いたが、それ以前においても魯迅ということで統一する。

二 「人の思想」

魯迅の「人の思想」とは、悪習や迷妄などに惑わされて自然淘汰されないように目覚め、群れより個人として自立し、虚偽・欺瞞・腐敗・奴隸的精神などが無い確固とした人として覚醒し、本来の内面を発揮し、人らしい人として立ち上がり、それにより人の国を築くということである。魯迅は、そうした人間観を人間評価の基準に置き、人を見る。虚偽・欺瞞・腐敗・奴隸的精神などが無いかどうか、個人として自立した確固とした人物かどうかを見る。

魯迅は幼少期より周房族の人々や農民などいろいろな人と交際し、祖父の入獄、父の病死、田舎への避難などと様々な体験をして、「大概世間の人々のいつわらぬ姿を見ることができる」（1922年）（5）、「腹の底まで大体わかるような気がする」（1926年）（6）といったように人を見る眼を成長させてきた。また、「時には所謂上流社会の虚偽と腐敗を感じる時があった。」（7）と述べるように、上流社会の「虚偽と腐敗」に当たるような尋常ならざることを早くから見聞し、それが後に「虚偽と腐敗」という認識になったのであろう。「虚偽と腐敗」は、魯迅の「人の思想」による望ましい人間像とは真反対のもので、最も忌み嫌われるものであり、「人の思想」による人間観に基づき批判されることばである。そして、進化論の淘汰説から中国と中国人の行く末に深い危機感を抱き、人に着目する見方を高める。物質より精神に重きを置き、個人として自立する個人主義や立人思想を唱え、中国と中国人を救うために、国民性の改造、「精

神界の戦士」による民衆の覚醒や文学作品による内面の覚醒を主張する。『文化偏至論』（1907年作）で、「世界に生存し列国と競い合うならば、第一に人を確立しなければならない。人が確立してはじめて全て事を起こすことができる。」(8)と述べ、個人として自立した確固とした姿勢を求める。1907年頃には、この『文化偏至論』や、『摩羅詩力説』を書き上げ、この「人の思想」を形成する。魯迅は、人々が迷妄から脱し「人の思想」を基に自立した人になるよう覚醒させるため、ニーチェやバイロンのような「超人」の中国における出現を熱望する。

詳しくは後述するが、1911年の辛亥革命では『《越鐸》出世辞』（1912年）が示すように、魯迅も期待してこの革命を迎え、浙江山会初級師範学堂の監督になる。が、辮髪がなくなっただけで、旧態依然とした有り様で、民衆の覚醒による革命ではなく失望に終わる。

やがて、この「人の思想」は、これも後述するが、魯迅の文学作品の作成の動機や意図と結びつき、作品の展開、仕組み等と深く関連する多くの作品を生んでいった。しかしながら、旧体制や旧文化に染まらないこどもに対する期待は徐々に失望に変わることが魯迅は作品の中で描く(9)。『孤独者』（1925年）では、期待をしていたこどもにまで攻撃され、転向し自滅する変革者の「魏連受」を描くまでに追い詰められる(10)。『再論雷峰塔的倒掉』（1925年）ではルソー、シュチルネル、ニーチェ、トルストイなどの破壊者は中国ではなかなか出現しないし、出現したとしても大衆の唾で溺死すると言う(11)。『野草』で、通行人の民衆は傍観するのみであると慨嘆し（『復讐』1924年、『復讐（其二）』1924年）、希望を再び持ち（『希望』1925年）、ともかく前へ行くしかないと悟り（『過客』1925年、『死後』1925年）、期待する戦士を描き（『這樣的戦士』1925年）、自己分析をするなど、彷徨する。そして、多数の若者が段祺瑞政

府に殺される事件に遭う（3・18虐殺事件、『淡淡的血痕中』1926年）。

三 魯迅の自伝等より

上層階層や下層階層についての魯迅の見方を知るために、自伝並びに自伝を含んだ書信を調べる。A『《呐喊》自序』（1922年）（12）、B『俄文訳本《阿Q正伝》序及著者自叙伝略』（1925年）（13）、C『魯迅自伝』（1930年）（14）、D『英訳本《短編小説選集》自序』（1933年）（15）、E『自伝』（1934年）（16）、F『致蕭軍』（1935年8月24日付け）（17）。

Aは、その時々のおもひを含め、経歴を叙述した文章で、民族復興、中国再興へのおもひは強い。階層に対する見方は特に記述されていない。

Bは、履歴を原因・理由、意思、目的、責務、結果等を明確にしながらか叙述している。が、特に階層に対する見方は記述されていない。

Cは、Bを簡略化したものであるが、1925年より1930年までの出版経歴が追筆されている。Bに同じく、階層に対する見方は記述されていない。

Dは、すでに第一節で取り上げた文章であるので、概略は省く。1933年当時、魯迅は既にマルクス主義を受容して階級史観を取り入れていた。魯迅は、この幼少年時代に当時の上流社会の人々や農民などの下層社会の人々について見聞き感じ思ったことを、この階級史観で捉えなおした見方がこの文章に表れている。ただ、上記の引用文章中の、「上流社会の虚偽と腐敗」、「上流社会の墮落」の文言は階級史観の言い方ではなく、「人の思想」に基づく批判の言い方である。

E『自伝』（1934年）は、中国現代短編小説集の『草鞋脚』の作家紹介のための手稿で、標題はない。BやCとほぼ同内容

であるが、紹興革命軍の首領が強盗出身でそのやり方に不満を抱いたため殺すと言われ、陳源が「魯迅」の正体を告げ口し、そのため段祺瑞政府により役人を馘にされ逮捕状も出され、1927年の清党に憤慨し、「自由大同盟」（1930年）、「左翼作家連盟」（1930年）、「民権保障同盟」（1933年）に参加し、1926年以降の出版物が禁書にされたことなどが追加され、辛亥革命の不徹底、反動文化人への批判、反軍閥、反国民党右派の旗幟が鮮明である。

F『致蕭軍』（1935年8月24日付）では、魯迅は手紙の中で自分のことを語っている。自分は「封建社会におけるおぼっちゃん（原文は「我正在封建社会里做少爷」）、「読書人家庭の子弟」、「没落した名家の子弟」であると。が、没落した人ではあるが思想がわりと新しく他人や将来を常々思いやるので比較的それほどには利己的ではないと述べている。これらの叙述から、階級意識が強く、また、階級についての自己認識があることが伺える。

これらの自叙伝等の内容は自伝であるからと言ってそのまま受け取るのは問題がある場合がある。たとえば、上記の自伝でも、父親の発病から死亡までは、『《呐喊》自序』では「四年あまり」（18）、『俄文訳本《阿Q正伝》序及著者自叙伝略』では「三年あまり」（19）で異なり、また、周作人は「四年間」に異を唱える（20）。記憶違いで数字を間違えるということもあるが、魯迅はある事柄について合理性を確保したいために辻褃合わせして事実を歪めることがある。しかし、こうした場合でも、事実や材料の真偽ではなく、その言わんとする骨子そのもの、あるいは繰り返し述べていることは魯迅の認識としては確かなことではないか。

AからFまでの自伝等からわかることは、AとBとCには階層に対する見方は現れていない。階層に対する見方が現れてい

なくとも、第四節でわかるように、1918年の『狂人日記』以降階層間の支配被支配は描かれていて、支配被支配という認識はある。Dには明らかに上層社会と下層社会とを対置しており、階層に対する認識は明確に現れている。Eには辛亥革命の不徹底批判、反動文化人への批判、反軍閥、反国民党右派の旗色を明確にしていることから、政治状況は複雑ではあるが、革命派に軸を置き、革命を目指す意識は明確であり、階級に対する認識は明瞭であることがわかる。このことは、辛亥革命の不徹底批判、反動文化人との論戦、清党批判、「自由大同盟・左翼作家連盟・民権保障同盟」に参加という事実が何よりも語っている。F『致蕭軍』には、自己規定に現れる階級意識が強く現れている。これらの資料から、1933年、1934年、1935年当時では明らかに階級意識は顕著である。第一節の冒頭に挙げた1933年著の『英訳本《短編小説選集》自序』も階級史観の立場で書かれたものであるが、「上流社会の虚偽、腐敗、墮落」は階級史観に拠らないので問題にしているのである。

四 魯迅の作品の登場人物

（1）小説等における支配者と被支配者についての見方

第一節ならびに第三節で取り上げた『英訳本《短編小説選集》自序』の中では、「私はいわゆる上流社会の墮落と下層社会の不幸を、次々と短編小説の形式で発表した。」とある(21)。ここでは、「上流社会の墮落と下層社会の不幸」をどのように「短編小説の形式で発表した」のかを探り、魯迅の階層についての見方や思いを追及し、また、「人の思想」の現れも探る。ただし、支配被支配が見られるものに限り、以下、（2）で八小説と回想文『范愛農』（『朝花夕拾』）、（3）『故郷』、（4）『阿Q正伝』を選んだ。

小説や詩は虚構である以上、魯迅の作品の中に描かれている

支配被支配の関係がそのまま魯迅の見方であるとは限らない。が、前段で取り上げた引用文であるが、「これまでに見た農村などの状況をも私の眼前にいっそうはっきりと再現した。」(22)と述べている。また、小説について、「書く事柄はたいはい見たか聞いたか縁のある事であるが、事実をそのまま使うのではなく、ただその一端を取り、これに改造を加え、あるいは発展させ、自分の考えをほとんど完全に発表できるところまでやる。人物のモデルも同様で、専ら一人だけを用いたことはなく、口は浙江で顔は北京で衣服は山西というように、いつも寄せ集めた人物である。」(23)と述べている。こうした発言からは、魯迅の意識において書かれた事柄は見聞した縁のあることが元になっていて、寄せ集められた人物の一部はモデルを基にしたものであることがわかる。書かれたことがすべて事実ではないことはないが、すべて事実であるとはいいがたい。そして、『朝花夕拾』の『小引』に、「この十篇は記憶の中から抜き出したものであり、実際の姿とは違うかもしれぬが、とにかく今日私の記憶ではこうなっている。」(24)とある。個々の事柄や材料ではなく、それらによって筆者が言わんとする骨子は魯迅の見方として確かなこととしてよいのではないか。また、支配被支配の関係が多く箇所で繰り返し描かれ、それらが基本的には同じ内容であれば、それらの箇所の骨子は、魯迅の見方とみなしてよいのではないか。

(2) 支配者の上層階層と被支配者の下層階層

分析のために作品内に、A 地方における支配者、及び支配体制や支配道徳・習俗による支配、B それらによる被支配、C 支配者の腐敗、墮落、虚偽 D 「人の思想」による覚醒の提起があるかという観点を設け、あればその記号を付ける。作品内に顕在していなくても潜在している、或いは、導き出される場合はその記号を[]付きで示す。

（ア）『狂人日記』（1918年）A、B、D

『狂人日記』では、「仁義道德」などの儒教倫理によって支えられ、「食人」の悪習がある旧社会から覚醒した「狂人」が、旧社会の虚偽の姿を暴露し、上層階層を含む人々に「食人」をやめ旧社会から脱し、「真実の人」に覚醒するように訴える。「人の思想」に基づき人が人らしく生きることを求める覚醒の提起が強く打ち出されている。

「狼子村」の小作人たちは「狂人」の兄の地主に不作で年貢を減らすよう訴えるが、兄の地主は応じない。家長の父親が登場せず、母親の影が薄く、兄が家長であるのは異例であるが、地主の専横や搾取、小作人の苦痛が描かれ、地主と小作人の支配被支配の関係は明確に捉えられている。地主の弟の「狂人」ですら治癒後、役人の候補になることができるのであるから地主の力は相当なものがある。金持ちの「趙貴爺」は支配する体制を壊そうとする「狂人」を怖がり、「狂人」を抹殺しようとする。これは支配被支配の体制があることを示す。また、県知事、お偉方、下っ端役人、金貸しが登場し、上層階層にも上下関係があることを示す。そして、さらに、「狼子村」の小作人たちによりその心肝が食べられる大悪人の革命家、「徐錫林」（徐錫麟）が登場し、「狼子村」の人々によってつかまった、秋瑾らしい男が処刑されその血が肺病病みに舐められる。被支配者を救済する革命家を被支配者が食べ、その血をなめるという深刻な事態が描かれている。

このように、階層の支配被支配関係も確かに社会構造として描かれている。が、「狂人」が人々に虚偽の生き方をしていると暴露し、覚醒を訴える主題がそれ以上に強く表されている。

なお、「狂人」は、正気が失われた、魯迅の母親魯瑞の姉息子阮久蓀を、医者「何先生」は何廉臣を、大悪人の「徐錫林」は徐錫麟を、つかまえられた男は秋瑾を一部思わせる所がある。

また、「狂人」の家は、父親不在で、母親の影が薄く、兄が地主の家長で、魯迅の家を思わせる所がある。

(イ) 『孔乙己』 (1919年) A、B、D

長衣を着る読書人階層の「孔乙己」は科挙試験に合格せず、酒飲みで怠け者で暮らしを立てる才覚もなく、乞食同然の暮らしをする。話によると、彼は財産に厳重な警戒をしていた「丁举人」の家に盗みに入り、捕まり、詫証文を書かされ、夜中過ぎまで殴られ足を折られたらしい。このことは、支配者の財産保持の欲望と、その財産を盗もうとした者には容赦しない支配者の姿勢を表す。そして、周作人によれば、「孔乙己」は没落旧家の子弟や貧しい読書人の代表で、「孟夫子」がモデルであると言う(25)。没落旧家の子弟としてはなんとしても科挙に合格したいが、何度も不合格になり、そのうえ酒飲みで怠け者で生計を立てる才覚もなく、遂に零落する。ここでも支配被支配の関係が描かれている。読む人に、「孔乙己」が零落し窮状に追いやられた原因を思わせ、人として覚醒し、人として自立し、人らしく生きることを求めさせる。「人の思想」が基盤にある。

なお、没落旧家の子弟とは魯迅であり、周作人であり、後出の周冠五であり、多くの没落した家の人々のことである。

(ウ) 『薬』 (1919年) A、B、C、D

『薬』では、「華老栓」老夫婦は肺病の息子に刑場で処刑された「謀反人」(秋瑾)の血を塗った人血饅頭を食べさせる。が、息子は死ぬ。「謀反人」は牢の中でも牢番に革命を説くが、処刑される。清明節の日に「華大媽」は息子の墓参りに行き嘆き悲しむ。「謀反人」の母も墓参りに行き嘆き悲しむが、墓に花輪が供えられていることに驚く。「謀反人」とゆかりのある「夏三爺」は密告し、大金を得る。迷信を信じた「華老栓」老夫婦と謀反のかどで処刑された息子の母の悲嘆を描く。また、保守体制の手先になっている「やつら」(原文は「他们」)、

処刑する兵士、処刑に群がる人々、並びに、彼らを支え、迷信を支える保守体制の愚かさや腐敗を描く。悲嘆や愚かさをもたらしたものは何か誰かを思わせ、人らしく生きるにはどうしたらよいか考えさせる意図があり、「人の思想」が基盤にある。

（エ）『明天』（1919年）A、B、C、D

『明天』では、寡婦の「単四嫂子」はこどもの病気がよくなり、医者「何小仙」に診せに行き、薬屋で薬を買う。その時、こどもはその薬を拒否するような仕草をする。こどもは死に、近所の人々の好意でやっと出棺ができる。その後、一人になった「単四嫂子」は明日又元のようになるだろうと思う。寡婦の生活の苦しさ、ありったけの金を払って診察してもらったが効果なく、唯一の希望を失う悲嘆、希望もなくやるせなく生き続ける村人の姿、虚偽の診断や処方金で金銭を巻き上げる墮落した医者への批判を描く。この中医は地主のような支配者ではない。が、民衆にとってすがりしかない上の地位にあり、その地位を悪用する点は支配者に似る。悲嘆や苦痛をもたらすものは何か誰かの追及を求めさせる意図があり、「人の思想」が基盤にある。

（オ）『風波』（1920年）A、B、C、D

『風波』では、「天子様」の即位は張勳の復辟を指し、辮髪が復活し、大赦が行われると噂が立つ。「趙七爺」は酒場の主人で名士兼学者でとおっている。彼は革命後は辮髪を頭の上に巻き付け、即位があると予測して辮髪を元のように垂らして、革命時に長髪賊に辮髪を切られた「七斤」のところにわざわざやってきて自慢をする。辮髪のない「七斤」夫婦は嘆き悲しむ。が、「趙七爺」は即位がどうもないと知ると又辮髪を巻き付ける。専制政治を執行し墮落した軍閥政府の一一の動向に中間階層や下層階層らが右顧左眄する姿を描き、支配被支配の強い関係を示す。その関係に気づき、目覚め、人らしさを回復する願

いが込められていて、「人の思想」は強く出ている。

(カ) 『祝福』 (1924年) A、B、C、D

新党を批判する地主の「魯四旦那」は、働き者で食い意地のない寡婦「祥林嫂」を低賃金で雇う。「魯四旦那」の地主と「祥林嫂」の家事手伝いとの関係において、支配・被支配の関係、搾取・被搾取、圧迫・被圧迫が見られる。そして、女性、嫁、寡婦の地位の低さ、及び、村の掟、習俗、迷信や人身売買などが彼女に圧迫と苦痛を与え、やがて死に至らしめる。「魯四旦那」及び彼を支え、慢性化して腐敗墮落した保守体制は直接手は下さないが、これらの寡婦の地位、掟、習俗、迷信や人身売買の習慣などを支え、被支配者に無言ではあるが強大な圧力をかけている。寡婦に過酷な圧力をかけ死に追いやったのは何か誰かを明らかにし追及させ、人らしくまともに生きるにはどうしたらよいか考えさせる「人の思想」が基盤にある。

(キ) 『長明灯』 (1925年) A、B、C、D

最年長で徳望家の「郭老娃」と「四旦那」は、土地廟の「長明灯」を消せと言う「狂人」を、村人と一緒になって遂に牢に閉じ込めてしまう。「狂人」は「長明灯」は旧体制、旧文化の象徴であることに気付いている。一方、保守体制の手先である「郭老娃」と「四旦那」、並びに体制に支配されている村人は、旧体制、旧文化の象徴を死守しようとする。「長明灯」を保守する愚かさ、腐敗墮落した支配者と共に死守する被支配者の愚かさに気付く、本来の自分に目覚めることを意図する「人の思想」が基盤にある。

(ク) 『離婚』 (1925年) A、B、C、D

『離婚』では、「愛姑」の別れ話に「慰旦那」の仲裁では収まらず、知事の義兄弟の「七大人」が仲裁に入り、金を更に積んで威圧し離婚を承諾させる。北京の洋学堂から帰ったばかりの青年や他の旦那も「七大人」の威光に平伏する。「愛姑」が

府の役所に訴えても、役人は「七大人」に相談するということから、役人と土地の有力者は結託していることがわかる。土地の有力者たちや役人たちは、互いの権益と地位の保持のため互いに結託している。支配層の深い仲間意識と強い結託力を示すが、同時に支配層の腐敗堕落を表す。強い者には従っておくのが身のためということが、民衆を束縛する虚偽の世渡りであることを知り、自らを束縛から解き放って目覚めていくことが求められる。「人の思想」が基盤にある。

（ケ）『范愛農』（『朝花夕拾』1926年）A、〔B〕、C、D
紹興光復後、「王金發」は軍政を敷くが、『范愛農』によれば、「昔風の郷紳のこしらえた郡政府」（26）で、「内情は元のままであった」（27）。結局「王金發」も革命によって生まれた上層階層の一人に過ぎないとわかってくる。『阿Q正伝』でも辮髪を切る以外何も変わらなかった革命であったと描かれている（28）。魯迅が直接目の当たりにした革命の実態は旧態依然としたもので、「王金發」に群がる有力者たちの上層階層が支配する構造には変わりはない。「王金發」は革命以前のような上層階層ではないが、魯迅の眼には、「王金發」とそれに群がる有力者たちは、虚偽に満ちた腐敗した、新しい上層階層に見えた。幻惑されず、事態を直視し、覚醒することが求められる。「人の思想」が基盤にある。

（3）『故郷』（1921年）と「閩土」 A、B、D

『故郷』では、「私」が引っ越しのため帰郷して、三十年前に憧れていた「閩土」との隔絶に悲哀を感じ、次世代のこどもたちにはこのような悲哀を味わわせたくないという思いにひたりながら故郷を離れていく。「私」は「閩土」の様子を見て、「子だくさん、凶作、重税、兵隊、匪賊、役人、土地のお偉方、それらが彼を苦しめて、木偶の坊のような人間にしまったのだ。」（29）と見て同情する。「閩土」を大きく変貌させたこ

これらの原因理由は、特殊ではなく一般的なものを列挙しているので、苦しむ農民への魯迅の見方が現れているとみてよいと思う。

そして、三十年前の昔のことを、「そのころは私の父親もまだ生きていて、暮らし向きもよく、私はまさに坊ちゃんだった。その年、私の家は大きな祭りの当番に当たっていた。この祭りは三十何年に一度しか回ってこないもので、だから大切なのだという話だった。」(30)と回想する。有力者である地主の家は裕福で、祖先を祭る程に伝統があり、地主の家の「私」は「坊ちゃん」なので優遇された境遇であることから、地主の家や「坊ちゃん」は魯迅の家や魯迅を彷彿させるものがある。實際上魯迅は福盆橋周族の十四世で大地主の長男であり、新台門の立派な屋敷で暮らしていた。もちろん用心のため全て合致させてはいないが、相当な部分で「私」と合致するところがある。

「閩土」親子について、周作人の『魯迅小説裏的人物』では次のように言う(31)。「閩土」のモデルは章運水で、その「閩土」の父のモデルは章慶福で、彼は周家に「忙月」として働く。章家は道墟鎮杜浦村にあり、極貧の生活を送る。また、章慶福が1893年に作品中の「閩土」の章運水を初めて連れてきてわら灰を持ち帰ったが、この年が1893年であることは次の理由ではっきりしている。作品では三十何年に当番が回ってくる祭りをわざと間違えて「致公祭」としているが、これは「佩公祭」で、その「佩公祭」を催す年に当たっていること、祖母蔣氏が亡くなった翌年であること、前年の冬は厳しく飢えた小鳥を簡単に捕獲できたので小鳥取りの話ができた年であること。その後も、章慶福とともに章運水も周家に来ているだろうし、その度ごとに魯迅と会うことになる。その後の魯迅と章運水との出会いは1900年正月で、運水のことを周作人の日記に記されている(32)。そして、魯迅は1919年の12月1日に北京を出発し、紹興で家を

畳んで29日に帰京している。魯迅と共に紹興を發った周建人は、魯迅の手紙を読んだ章運水が別れの挨拶に来たと言う(33)。当時の章運水の変貌については、周作人は章運水が不倫のことで痛手を受け、ひどくやつれていたと言う(34)。魯迅はそんな事実は知らなかったであろうし、「子だくさん、凶作、重税、兵隊、匪賊、役人、土地のお偉方、それらが彼を苦しめて、木偶の坊のような人間にしてしまったのだ。」と、一般的な原因理由を列挙している。このように、地主の長男の魯迅と半小作農の息子の章運水との何回もの交流は事実であって、魯迅に、自分とは階層が違うこと、農民の暮らし向きがひどいことや、「子だくさん、凶作、重税、兵隊、匪賊、役人、土地のお偉方」が農民を圧迫し、苦痛を与えてきたことを知った。「私」の生い立ちと「閩土」親子の生い立ちとを比較し、隔絶した相互の複雑な思いを鑑みることによって、両者を引き裂いた支配被支配の構造の存在に気付かせ、その巧妙な仕組みを読者に思わせる。「私」と「閩土」を切り裂く支配被支配の体制は非常に強いが、階層を超えて人と人が人らしく交際できるにはどうしたらよいかと考えさせる。「人の思想」が基盤にある。

（4）『阿Q正伝』（1921年・1922年）A、B、C、D

「阿Q」は、自分では「趙家」一族と言っているがはっきりせず、名も生まれもはっきりせず、土地も家もなく家族も親戚も友人もいなく、ただ雇用の声がかかるのを待つばかりの暮らしをする。「精神勝利法」を駆使して自分を直視せず自尊心のために欺瞞や虚偽を働かして気持ちを支える。この「阿Q」の活動の展開により様々な人物像を浮かび上がらせ、それらの正体を明らかにし、「革命」の実態を暴露する。

「阿Q」の住む「未庄村」の支配者は「趙旦那」、その息子「秀才」、「錢旦那」、その息子「ニセ毛唐」で、城内では「白挙人」である。「趙旦那」は「阿Q」と同姓であることを自己

保身のため嫌い、確かしめもせず強引に否定する。「趙家」は「阿Q」等を不当な条件で雇い、搾取し、より多くの利益を追求する。「阿Q」が「呉媽」に求婚したことで「秀才」が「阿Q」に度を越した虐待を働き、不当で過大な五箇条の要求を突きつけ、「阿Q」が要求を全部満たしても約束を履行せず、利益をむさぼる。革命後役職に就いた「白挙人」が、「趙家」に預け、収奪された財産の奪回を優先するように隊長に要求する。

「知県、把総」も引き続き隊長の補佐の役職を得る。他の地主も役職に就いたであろう。革命に恐怖を覚えた「秀才」や「ニセ毛唐」が革命黨員になりすまし、「静修庵」で竜牌を壊す見せかけだけの革命行為で地位保全を狙い、役職を得る。「趙白眼」は、でたらめな演説の革命行為で自己保全を図る。このように腐敗墮落した支配者たちは、一方では被支配者への圧力、搾取、虐待、不当要求を行い、「阿Q」に革命への参加を許さず、一方では自己の地位保全を図り、自己の利益を追求し、革命を横取りし、旧態依然とした名だけの革命にしてしまう。

被支配階層の最下層は、雇農の「阿Q」、「ひげの王」、「小D」である。「小D」は「彼の名は『小D』」と言い、大きくなれば『阿Q』と同じようになりましょう。」(35)と魯迅が言うように「阿Q」と同じような境遇で、「ひげの王」も風体から言って「阿Q」や「小D」と同じ境遇であろう。「阿Q」は雇農であるが、求婚事件により誰も雇う人がいなくなり、遊民となる。土地・家もなく、家族・親戚・友人もなく、定まった仕事もなく、あるのは体一つとぼろ服で、仕事がないので盗みを働くしかなく、村民から最も蔑まれる。毛沢東によれば遊民の「阿Q」は「遊民無産階級」であり、革命の主体者になりうるという(36)。が、支配者たちは革命への参加を許さなかった。

「阿Q」は処刑という現実に向かいながらも、人々の狼の眼のような眼差しに射られて恐怖に駆られても、なお敗北や屈辱を優

越や勝利に変えてしまう「精神勝利法」を駆使する。孫なら自署の代わりとなる丸くらいは書けるだろうし、生きていれば獄に継がれ首を切られることもあると思いなして急場を凌ごうとする。このような精神の操作の仕方や無自覚は「阿Q」だけではなく、他の人にも共通する問題であろう。

その「阿Q」の引き回しをもの珍しげに見る見物人は、人の不幸を我が身とせず、社会の支配の仕組みや自分の被支配性に気が付かない。「阿Q」と見物する民衆との関係、見られる者と見る者については、『狂人日記』の「狂人」と「村の人々」（1918年）、『長明灯』の「四旦那の孫」と「村人やこどもたち」（1925年）、『示衆』の「罪人」と「見物衆」（1925年）、『復讐』の「男女」と「通行人」（1924年）、『復讐（其二）』の「神の子」と「兵士、見物人」（1924年）と基本的には同じである。また、仙台医学専門学校での、幻燈に映し出された斬首される中国人と、見物する中国人との関係も基本的には同じである。

支配者が被支配者より搾取し、革命を横取りし、自己利益のみを追及する問題、「阿Q」が「精神勝利法」により実態を直視せず欺瞞のまま死ぬ問題、「阿Q」に革命を許さない問題、民衆が人の不幸に共感せず引き回しをただ傍観するだけの問題、それらの問題を読み手に突きつける。階層間の支配被支配の問題もあるが、それ以上に人の問題を強く提起する。人に巢食う「精神勝利法」などにより自分を麻痺させ、傍観者に甘んじ、現実を直視せず、自分をごまかす問題を強く提起し、覚醒を促し、「人の思想」を説く。

（5）第四節のまとめ

以上の作品の書かれた期間は『狂人日記』の1918年より『范愛農』の1926年までである。作者の言わんとする骨子として、また、同様のことが繰り返し描かれる所の骨子として、いずれ

の作品においても描かれている、地方の上層階層あるいは封建社会による支配と下層階層の被支配、そして、腐敗墮落した上層階層があることを魯迅の認識と見なしたい。

既に1918年1919年頃には支配被支配の関係は認識されている。また、それらの支配の仕組みも認識されている。支配は、地主、郷紳、役人などによって行われ、あるいは、掟、習俗、迷信、低い女性の地位などを含む封建社会によって行われる。被支配は、農民、民衆、寡婦、こども、「阿Q」のような遊民である。そして、支配被支配は大きく取り扱われる場合もあるし、ほんの少しの取り上げの場合もあるが、それらの問題は提示はされた。

そして、(2)、(3)、(4)のすべての作品において、「人の思想」による覚醒の問題が提起され、覚醒が求められている。魯迅は、「私の題材は病的な社会の不幸な人たちから多くとっている。病苦をあばきだし、治療して救えと注意を促すためである。」と述べている(37)。このように問題を提示しその解明を求め覚醒させる意図は、作品内の進展や工夫においても発揮される。特に『狂人日記』、『長明灯』、『阿Q正伝』では覚醒の提起の意図は強く、その仕組みは巧妙である。つまり、「人の思想」を基にした覚醒の具体的方法として文学作品作成があり、その作品の進展や仕組みにも覚醒に導くように工夫されている。

魯迅は、支配被支配の社会問題を認識し、また、その支配の仕組みも理解している。ただ自分の役割、即ち、文学によって社会の問題を描き、読者を啓蒙し、「人の思想」に基づく覚醒を迫り、また、翻訳活動により外国作品や作家を紹介するという役割に取り組む。また、「超人」が出現し、人々を覚醒し、「人の思想」を展開させてくれるのを待つ。魯迅は支配被支配の問題は認識し提示するが、打開方法の提示はない。そのため、

魯迅にはその支配被支配の問題は残存することになる。

そして、啓蒙活動や覚醒運動を展開する魯迅は、北京女子師範大学を巡る争い（1925年）などに、また、保守と革新との争いに必然的に巻き込まれていき、積極的に問題についての論争を展開していくことになる。そして、「3・18事件」（1926年）が起これ、そのため1926年北京を追われ、厦門、広州と転居し、広州でも「反共クーデター」（1927年）が起これ、上海に落착く。そして、文化界における保守と革新、革新と革新との論戦に挑み、1928年「創造社」と、1929年「新月社」と、1931年「御用文学」と論戦し、1932年「第三種」論を論じる。また、多くの雑感文で応戦していく。（次号に続く）

〈注 釈〉

- (1) (7) (15) (21) (22) 魯迅『英译本《短篇小说选集》自序』（1933年、『集外集拾遺』）389頁、389頁、389、390頁、389頁、389頁、『魯迅全集第七卷』人民文学出版社1981年版。以下『魯迅全集』は人民文学出版社1981年版を用いる。
- (2) 魯迅『革命时代的文学』（1927年講演・発表、『而已集』）417頁、『魯迅全集第三卷』。
- (3) 魯迅『中国无产阶级革命文学和前驱的血』（1931年、『二心集』）282頁、『魯迅全集第四卷』。
- (4) 魯迅『黑暗中国的文艺界的现状』（1931年発表、『二心集』）285頁、『魯迅全集第四卷』。
- (5) (12) (18) 魯迅『《呐喊》自序』（1922年、『呐喊』）415頁、415～420頁、415頁、『魯迅全集第一卷』。
- (6) 魯迅『琐记』（1926年、『朝花夕拾』）293頁、『魯迅全集第二卷』。
- (8) 魯迅『文化偏至论』（1908年、『坟』）57頁、『魯迅全集第一卷』。
- (9) 拙論『《孤独者》一考察』19、20頁、『佛教大学中国言語文化研

- 究 第10卷』2010年。
- (10) 鲁迅『孤独者』（1925年、『彷徨』）86～108頁、『鲁迅全集第二卷』。
- (11) 鲁迅『再论雷锋塔的倒掉』（1925年、『坟』）192頁、『鲁迅全集第一卷』。
- (13)(19) 鲁迅『俄文译本《阿Q正传》序及著者自序传略』（1925年、『集外集』）82～84頁、83頁、『鲁迅全集第七卷』。
- (14) 鲁迅『鲁迅自传』（1930年、『集外集拾遗补编』）304, 305頁、『鲁迅全集第八卷』。
- (16) 鲁迅『自传』（1934年、『集外集拾遗补编』）361, 362頁、『鲁迅全集第八卷』。元来標題はない。
- (17) 鲁迅『350824致萧军』（1935年、『书信』）195～197頁、『鲁迅全集第十三卷』。
- (20) 周遐壽『第一分 二父亲的病』5頁、『鲁迅小说里的人物』上海出版公司1954年。
- (23)(37) 鲁迅『我怎么做起小说来』（1933年、『南腔北调集』）513頁、512頁、『鲁迅全集第四卷』。
- (24) 鲁迅『小引』（1927年、『朝花夕拾』）230頁、『鲁迅全集第二卷』。
- (25) 周遐壽『第一分 八孔乙己』14頁、『鲁迅小说里的人物』上海出版公司1954年。
- (26)(27) 鲁迅『范爱农』（1926年、『朝花夕拾』）313頁、313頁、『鲁迅全集第二卷』。
- (28) 鲁迅『阿Q正传』（1922年、『呐喊』）517頁、『鲁迅全集第一卷』。
- (29)(30) 鲁迅『故乡』（1921年、『呐喊』）483頁、477頁、『鲁迅全集第一卷』。
- (31) 周遐壽『第一分 三一两个故乡 三二看守祭器 三三闰土父子』49～53頁、『鲁迅小说里的人物』上海出版公司1954年。
- (32) 周遐壽『附录一 九庚子一』254頁、『鲁迅小说里的人物』上海出版公司1954年。初六日に兄は章水と応天塔に登ったと記されて

いる。

- (33) 周建人口述，周晔编写『一别了，故乡！』4頁、『鲁迅故家的败落』湖南人民出版社1984年。
- (34) 周遐壽『第一分 三三闰土父子』53頁、『鲁迅小说里的人物』上海出版公司1954年。
- (35) 鲁迅『寄《戏》周刊编者信』（1934年、『且介亭杂文』）151頁、『鲁迅全集第六卷』。
- (36) 毛泽东『中国社会各阶级的分析（一九二六年三月）』3～9頁、『毛泽东选集 第一卷』人民出版社1952年第二版。